
俺に惚れてみる。

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺に惚れてみる。

【Nコード】

N1962BA

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

クラス、学年、他学年…と告白された人をコンプリートしてきた俺。 だけど、有る奴にだけは告白されない！！ そいつは、クラスの隠れ美人でクールなあいつ！ 絶対、俺のこと振り向かせてやるから。

知らない(前書き)

男性視点のノーマル恋愛連載は初めてだ がんばる

知らない

学校中で俺のことを知らない女子なんていねえ。

それが、俺・青山良輔あおやま りょうすけのモットー。
だけど、あいつに会うまでの話だが。

* * *

学校に來りや女子の黄色い悲鳴。日常茶飯事。
につこり笑顔を作つて挨拶してやればイチコロだ。

告白された回数は数え切れないほど。
クラスの女子、学年の女子、さらには他学年までコンプした。
全部断つただけだな。俺の テク で。

「よ、はよーっす」
「おう」

そんな俺と未だに仲良くしてくれる友人様の登場だ。
俺のこの人生に呆れがさして逃げてく輩ばっかなのによ。
こいつは久山ひさやま あつし。

「な、お前朝からうるさかねーの」
「別に？」

俺よりもてねーのに彼女持ちっつーね。
「あーそ ま、頑張れ」
先行くわ、と走つていった。

国語の授業。

自習で、図書室で読書だった。

俺は本を探すという口実で昼寝をしに本棚へと歩いて行った。大分、深い場所まで歩いてしまったせいかな人は少なかった。だけど、一番端に一人。

「え……」

すごく綺麗な人がいた。

「何？」

「あ……いや」

「本探してるの？手伝おうか」

「誰だろう……、同じクラス……なんだよな……」

「名前は？」

「いやね、同じクラスでしょ。笹木ひなみ 琴音ことねよ」

「笹木……か……」

「君どんな本が好き？」

「あー、昼寝しよつかないって……」

「あら、そう？学校一の男子なのにサボるとか意外ね」

「……」

「なあに？あら、偏見だったかな？」

「いや……」

な

なんだこいつ！？俺に一切の関心がねーみたいじゃん！

……そーいや、笹木 琴音っつー女子から告白されてない！？

……これは……、オトし甲斐がありそーじゃんか？

知らない(後書き)

頑張るよ、僕

図書室の美人

「ぶっ あっはははははははははー!!」

俺の話を皆まで聞かず笑い出すあつし。

俺の笑顔が固まった。

「ひーっ いや、すまん…てゆうか、お前マジ関心ねえのな」
「はあ？」

確かに女子に告白される、以外には女子なんて関心はない。
主人公にあるまじき思考だが。

「笹木さんはな、お前と同じなんだよ」

「どういう意味」

「いっぱいコクられてんだよ」

「へー」

「ま、流石にお前みてーじゃねーけどな。

でもよ、断ってるらしいぜ。『私は本が恋人なの』って。気取ら
ねえ隠れクール美人って萌えるよな」

勝手に萌えてる。

「ふーん、俺以外にもいたんだなー」

「お前の場合致命傷だけどなコクられるのが一番の生き甲斐だろ？
ひでえもんだけ」

「るせえよ」

「じゃあさ」

と、提案するあつし。

「昼休み、図書室行けば？」

「あ？」

「あの人、本が恋人つつーほど本好きじゃん？毎日図書室に居んだ
よ」

「へー…」

* *

……。なんか、ハメられた気分。
と言う訳で、俺は図書室の前にいた。

あつし情報？ 『笹木さんは、図書室の古い本を読みあさるのが好きらしいぜ』

まあ、この前も奥の方にいたし…。

女子の黄色い声なんて無視して奥に進む。

すると、陽の当たる暖かそうな場所に本を読む美人一人。

俺は息を呑んだ。 光の具合と、首の傾き…全てが凄く…綺麗だった。

「あら」

こっちに気付いて微笑んだ彼女。 俺はドキっとした。

「お昼寝王子、読書かしら」

「……………べ、別に」

「そうね。あなたはあまり読まない気がするわ」

パタン、と本を閉じる。

「私にご用？」

「あ……………」

ポイントをここぞとばかりにつかれた。

「どうしたの？冗談だよ。あなたが私に用なんてあるわけないでしょ」

「よ」

「……………ぐ」

「こっち来たら？あつたかいよ」

断る理由もなく…。

「…あ、ほんとだ」

「私が嘘言うと思ったの？」

「……うぐ」

「あー！ー！青山君みーっけ！ー！」

「げ」

「じゃ、私行くわね」

「えっ、ちよ……」

俺は女子の奇襲であえなく計画は失敗した。

愚痴話

あつし情報？』図書室に居場所がない場合は屋上にいるらしい』

と、言われてきてみたものの。

笹木の姿はなく。

「んだよ、ハズレか」

「鬼ごっこでもしてるの？」

「！」

上を見ると、給水塔が置いてある場所に彼女は居た。

「今降りるから」

と言つて地味にはしごを降りる。

体育の成績は芳しくないの、と笑つた。

「さつきから、何？」

「いや……た、たまたま逃げてきた場所がお前のいる場所だつたんだつつの」

「あら、王子が本音をたらすとはね」

「うぐ……」

しまった、こいつの前だとどうしても王子おれが出せねえ……。

「あーあ、何か本読む気なくしちゃつた。ね、お話しよつか」

「……」

「いやかしら？別にいいのよ。まだ時間はあるし散歩でもと思つてたんだから」

本つつつつつ当に眼中にねえんだな！

腹立つことを通り越して清々しいわ！

「？ じゃ、行くわね」

「あ、いや、待て」

って、何引き止めてんの!?

「は…話しようぜ」

「くす、いいわよ」

話…というか、ほとんど俺の愚痴が半分以上を占めていた。でも、笹木は嫌な顔せず、しっかり聞いてくれた。

まだまだ話したいことはいっぱいあったのに、惜しくもチャイムが鳴った。

クラスは同じだから一緒に帰ることにしたんだが…

「いやよ。だってあなた王子なんでしょ」

と、否定された。

王子、か。

いつからだだったかな。そうやって気取ってたのって。

じゃなくて、本来の趣旨忘れてんじゃない!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1962ba/>

俺に惚れてみる。

2012年1月6日02時45分発行